

主婦と地域活動

個別事例調査から

中川久美子 〈企画調整局都市科学研究室〉

はじめに

横浜市内に住んでいる主婦の中で、自らの住む地域社会に積極的にかかわりを持ち、活動をしているのは、どのような人たちであろうか。また、その人たちはどんなきっかけでどのような活動をしているのか、家庭生活との両立はどうか、社会をどうみているのか。このような関心から、十数名の主婦にあってみた。対象者は、市役所や区役所の各セクションから紹介された人々で、年齢は30歳代から60歳代までである。活動を始めたきっかけやその中味、方法は全く個々様々なので、一つ一つの具体的な例からみていきたいと思う。

1——さまざまな活動のかたち

(1) 『学歴社会』の中の余裕人間

神奈川県S町に住むYさんは37歳、小学校2年と幼稚園年長組の男の子2人がいる。Yさんは、3年前から『つつじ文庫』を始めた。自分の家にある子どもたちの本を、近所の子どもにも読んでもらおうと思ったのがはじまりである。3年前の最初の貸し出し日は、たった4名の子どもが来ただけだったが、現在は、土曜日の貸し出し日になると、150名前後の子どもがYさん宅におしかけ、外にまで行列ができるという。子ども同志が誘い合い、人数は急増し、会員は小学校1年生から中学1年生までで、260名。バスに乗って、となりの町から来る子どももいるという。毎年5月27日には、文庫の記念バザーを開く。文庫を運営するYさんら数名の主婦が、ものさし入れ、給食袋、エプロン、水あめなどを手作りし、それらを子ども小遣いで買える程度の値段で売る。会場は裏山の広場、この日は不思議と雨は降らないのだそう。去年の売り上げは、6万2千円。バザーを手伝ってくれた子どもたちと伊勢佐木町の右隣堂まで行って80~85冊の本を買い込んだ。現在では、1,000冊の本がそろっている。文庫もバザーも、子どもたちの共感をかったのだから、大盛況である。

Yさんがこの文庫を思いついたのは、病気中のことであった。以前、なにげなく読んだ石井桃子著の「子どもの図書館」という本をふと思い出し、もう一度読み返してみるうちに、自分で文庫をやってみようと思ったという。「家にじっともっているのはいやだ」という気持ちとも重なっていたようだ。思いついてから2・3年の間は、講習会や研修に出て準備をすすめた。YさんにはYさんなりの文庫像があった。このあたりは農村地帯である。本屋は一軒もないし、学校の図書館

にも本はまばら。ちなみに、現在、小学校の図書費は年間6～8万円。800人から1,000人の生徒に対して余りに少ない金額である。子どもたちにとっては、良い本を手にする機会は全くないといってよい。テレビや漫画のひき写しではない、心の足しになるような何かが必要と思ったという。もともとYさんは、結婚する以前に5年間小学校の教師をしていた。結婚して2年目、長男が生まれた時に退職したが、子どもと遊びながら読書指導をかねた文庫は、Yさんの職業経験にもぴったり合ったといえよう。

活動の拮げかたは、「ほんとうに自主的な気持ちをもっている人ならお手伝いしてくれるはず」と思い、運動の主旨を理解してくれる人をだんだんに増やしていった。「PTAの場で発言すると、読書は国語の成績があがるのに役立つから良い」とか親の期待が先にでてなかなか理解されにくいという。これに対してYさんは、「読書は遊びのひとつ。自由な精神活動である。子どもたちは、社会の部品としてではなく人間として成長してほしい。私たちも、お金の余裕はないけれど、精神的な余裕をもち、高級な暇つぶしと思ってやっている」と語っていた。Yさんの夫も小学校の教師、隣に住む姑ももと校長であったという教師一家である。今度、庭先に12畳のプレハブの集会所をつくり、図書室も広くなる。夫の作った模型を見せながら、「夫もこういうことの好きな遊び人間ですから」と笑う。図書館作りは、行政の仕事と思うが、行政からは、「予算がないので」という返事しか返ってこないのだそうだ。しかし、たとえ公共の図書館が建ったとしても、この文庫は独自の道をすすめたいという。意欲的な活気に溢れた活動のように見受けられた。

(2) 身近な権威への抵抗

Sさんは現在53歳。保土ヶ谷区のある公園の団

地の婦人学級のリーダーをして10年以上になる。昭和34年にこの団地に入居したが、当初、地域を特に意識していたわけではなかった。子どもが中学校に通い始めた頃、交通の便が悪かったため特別学区にしてもらいたいということから、PTA活動に参加することになった。その時、PTAの会長の座が市議員の勢力争いの的になっており、しかも自分の住んでいる団地の自治会もその中にまきこまれていた。Sさんには、その人たちの目的がいずれも、ただ権威がほしいというためだけのものを感じられた。その対立の中でSさんは、PTAの会則を改正し、投票制にするなどの運動をおこし、今では、それは正常化運動として理解されている。男の人たちに、「すごまれ」たり「会議の席で机をたたいての怒り合い」の中でも、一貫して姿勢を崩さなかったのは、出かける時に夫が後から「筋を通してこい」と励ましてくれたからだという。Sさんにとっては、とくに地域を意識したというよりは、権威と対立してゆくのがはじまりであった。その後、PTAの副会長に推薦され、コーラス部や読書会の活動から婦人学級を作り、自治会へ参加してゆくという経路をたどった。

現在、婦人学級のメンバーは、30歳代から60歳代まで15名から20名程度。毎週月曜日の午前10時から団地の集会所に集まり、読書会をしたり、政治から家庭内のことまで様々な問題について話し合う。ただし、人の悪口を言わないことを原則としているという。現在は、もろさわよう子著の『女の歴史』を読んでいる。また、市や県からの委託業務、たとえば、今年4月の統一地方選挙の際には、投票管理者を引き受けたり、あるいは各種の調査の手伝いなどもしている。

Sさんにとっては、満州で終戦を迎えた後のひきあげの体験が強く残っている。その時から「人生はドラマ」だと思ふようになり、「男の人たち

にすぎなくても筋を通せたのは、あの時の体験でもおじしないところができていたせいでしょう」と語っていた。活動をしていると、「人間的なつながりの中で友人にも恵まれ、良かったと思うことが多い」という。いやなことは忘れるあっさりとした性格と筋の通った人柄が活動を支えてきたようである。

(3) さりげない福祉活動

旭区に住むRさんは、50歳で、子どもは26歳と22歳の2人である。Rさんは、横浜市内のある老人ホームで三味線と日本舞踊を教えて10数年になる。長い間には顔なじみの人たちが増え、市や県の社会福祉協議会からもいろいろな依頼を受けるようになった。たとえば、7、8年前からは中区寿町の「たいまつ祭り」の時に、やはり踊りを教えに行ったり、また「言語障害児をもつ母の会」の集まりの時には、子どものお守りを引き受けたり、この頃は、手話法を習い、盲聾学校へ行っておしゃべりをするのが楽しみであるという。

Rさんは北海道の札幌生まれで、結婚するまでそこにいた。両親はクリスチャンであり、幼い頃、よく母親に連れられて施療院へ花を届けに行った。その頃の両親の生活の仕方が自然に身につけていて、結婚後も、転居先の町々で、好きな三味線と踊りを生かして、施設をたずねたりした。Rさんは、結婚前に約4年間小学校の教師をしていた。その当時の経験が、三味線や踊りを教えたり、あるいは会合にでて発言したりすることの役に立っているという。

Rさんの活動は、とくにこれがきっかけということがあって始まったわけではない。むしろ、親しい人間関係をつくってゆく中で、自然にそのような生活のかたちができあがっているとみた方が適当のようだ。15年ほど前、ボランティアという言葉が日本で使われるようになったが、その時、

自分のしてきたことがこれにあたるのかなと思うたという。ボランティアの精神について、Rさんは次のように語る。「赤ちゃんがよちよち歩いている時に、そこにある石ころをどけてあげるという気持ちのもち方が基本でしょう。私は、子どもが小さい時は、子ども会活動を手伝ったり、その時々で無理のないようなやり方をしてきました。この頃、えらい方が年に1・2回施設を訪問したりすることがよく話題になりますが、そのような慰問にどのような意味があるのかしらと思います。たとえば、もう足腰も自由に動かなくなった老人の方で、施設に入っている子ども達の誕生日を調べて、その日に葉書で「誕生日おめでとう」と書いて送っていらっしゃる人もいます。このように自分の生活を大切にし、その上でできることをやってゆくこと。そして長続きさせることが必要です。しかも、ボランティアは単なるお人好しでもだめ、相手にとって何が必要かをよくみて、自分の役割をわかまえることが大切です」と。今、福祉、福祉と何かにつかされたようにいわれているが、Rさんは、その福祉に対する考え方に、何か矛盾を感じるが多い。たとえば、言語障害児をもつ母親の会の集まりの時に、市長を囲んで話し合いがなされていた。ボランティアの人たちもたくさん来たのだが、皆、市長との懇談にでてしまい、残された子どもたちのことをみる人がいなくなってしまった。Rさんは1人で駆けまわって面倒をみたが、「市長に陳情をするのも大切だけれど、障害児達をほうりだしたままでいいのかどうか……」と疑問をなげかけていた。政治活動や宗教活動のためのボランティアには、何かちがうものを感じているようであった。Rさんは、グループには属していない。施設へ行っても、1人1人友達をつくってゆくような気持ちであるという。しかし、相手も喜んでくれて自分も楽しいというだけでなく、全体の中でどうするかということも

考えなくてはね、仲間を増やしてゆくことも必要だし、私はPR不足でしょうかと結んでいた。

(4) 地域に根づいた子ども会活動

Mさん37歳は、中区A町の生まれで現在も同じ町内に住んでいる。家族は、夫と長男(12歳)、長女(10歳)、次男(7歳)の5人である。末の子が2歳になった時から地域の子ども会活動に参加し、5年前からはその会長と青少年指導委員をしている。Mさんによると、今の子どもたちは、学校の同じ学年同志では遊ぶが、年齢のちがう子どもたちの結びつきはあまりないという。そんな時に、子ども会の行事、たとえば、もちつき大会やたこあげ大会、健民少年団のスキー大会などで、年のちがう子どもたちが生々と遊んでいるのを見るととてもはげみになるという。

一方、Mさんは、4年前の4月、「ひまわりグループ」という古典文学の研究会の発起人となり、「広報よこはま」の区版で呼びかけ、区内50人の主婦のサークルを作った。子ども会活動で区役所と接触があり、市民課から呼びかけがあったのがきっかけである。最初の2年間は区から補助金(年4万円)を受けたが、昨年からは1人年会費2,000円を取り、自主運営で続けている。会場は、Mさん宅の真向かいの青少年図書館で、テキストは「万葉集」「良寛」「奥の細道」を使っている。良い先生に恵まれた上、月1回ということもあり出席率が非常に良い。40歳前後の主婦が多く、2月に1回は文集もだし、それぞれの作品を読みあったりもする。参加する人たちには、「自分で書くことによって、ものをみる目を養うこと、本物を見分けたい」という気持ちが強いという。

また、Mさんには、最近区の社会福祉協議会からボランティアの誘いがかかり、研修にも出てみたが、「施設を慰問することだけがボランティアではなく、現在の子ども会活動も、りっぱなボラ

ンティア活動ではないだろうか」というのがMさんの気持ちである。活動の仕方が地域に根づいており、その点は、次のような市の教育委員会主催の婦人国内研修に出席した時の報告にもみられる。

「主婦が1週間も家をあけるには、夫の理解もさることながら、子どもたちが成人しているとか、バリバリの姑がいるとか、夫と子どもを実家に預けるとか、いろいろな条件がないと実行しにくいことであるが、私の場合は、住んでいる子ども会の役員7人による協力があったから(参加)できたのである……。」

Mさんは、このために1週間分の献立を作った役員の人に頼んでおいたという。家事はいつも先手をうち計画的に片づけ、子どもにも少しずつ料理を教えている。長男は、ある時作文に「自分の家のことだけでなく地域のことをいろいろしている母親を尊敬している」と書いた。夫は、結婚の時、「お互いに相手に干渉しない」という約束をしたためか、活動については何もいわない。Mさんは、家族や地域の人々をじょうずに納得させながら活動をすすめているすぐれたリーダーのようである。

(5) 点訳の仕事をして18年

Tさん61歳は、中区のある見晴らしのいい丘の上のマンションに、夫と次男(30歳)の3人暮らし。すでに長男と長女は結婚して、外孫が5人いる。

Tさんは、昭和32年、43歳の時、日本赤十字神奈川支社の「点訳講習」を受けて、点訳奉仕団に加入した。約18年のうち、大半は役員を引き受けてきた。きっかけは、次男が6歳の時、ストマイが原因の難聴になって不自由な生活をしているために、目の悪い人も不自由さには変わらないから、その役に立ちたいということであった。さらに、

40歳代のTさんには、家にいるだけでなく何かをしたいという気持ちもあったという。長く役員を続けてこられたのは、「人を引っぱっていくのはだめだけれど、喧嘩もできないただだからでしょう」といっている。そのことのために、夜の帰りが遅くなっても、夫からは今まで一言も文句をいわれたことはないし、またTさんの方も、夫のために外泊を必要とする交歓会などの参加はしないで、それなりに気をつけてきた。最近、学生や主婦、勤め人などで、点訳奉仕団に加入する人が次第に増えている。主婦は、自分の時間ができたので社会へ奉仕したいという気持ちから加入する人が多いが、夜の会議や外泊をとまなり交歓会への参加は、家事との関連で、出席しにくいのが実情だろうといっている。Tさんは、長いボランティア生活の体験から、「ひとりの人が立派な活動をするよりも、その精神を多くの人が学びとることが大切である」と穏やかな調子で強調していた。また、Tさんは、もう25年近くも俳句を作り続けている。「一善一歩」というのが生活のモットーであるという。

(6) 学童保育11年

49歳のAさんは、緑区で生まれ、25年前に結婚し、現在の神奈川県K町に移り住んだ。家族は、夫(50歳)と長女(27歳)の3人。次女はすでに結婚し市内に住んでいる。

Aさんは、今年の3月まで11年間も市から町内会を通じて依頼された学童保育を、地区の青少年の家を使って続けてきた。3月にやめたのは、地域の子どもたちが大きくなりその必要も少なくなったということもあるが、何よりも「疲れた」ためである。

学童保育とは、母親が働いている家庭の子どもを、下校後預かり保育することである。Aさん夫婦は、戦後まもなくこの地域に焼けトタンのバラ

ックがたくさんある時代から町内会の役員や公園の運営委員をしてきた。役所から学童保育の話があった時は、地元から盛り上がりがあったわけではなく、町内の役員をしていたために、その運営委員長を引き受けることになった。Aさんは、パートタイマーとして働く指導員と違って無報酬で毎日、昼からの時間を学童保育にあててきた。毎日のおやつ代やハイキングに行く時の費用は全部自前、月5,000円ぐらいの身銭を切ってきた。

はじめた当初は、どちらかというと生活に困っている家庭、たとえば、父親が病弱であったりあるいは父親がいないために、母親が働きに出ざるおえない家庭の子どもが多かった。しかし、昭和45年前後からは、10人のうち9人までが学童保育があるならば利用してパートに出なければ損だという人で、子どもにきれいな着物をきせたり、旅行に行くための費用かせきに変わり、パートタイムが一種の流行になったという。そうした親をみると、自分のしていることが「ばかばかしい」と思えたが、子どもたちが、Aさんが季節のおりおりに作る手作りのごちそう、月見のだんごやおしるこやおはぎなどにとても喜び、母親にもましてなついてくるのがかわいかったのが支えになってきたということである。また、子どもの両親が、悩みごとを相談にきたりして頼りにされることも多く、振り返ってみると「いろいろな人と接することができて充実して歲月だったと思わなければ……」と語っている。しかし、これはあまりに犠牲の多い仕事であり、民間の負担でやるという役所の姿勢に疑問を感じているということであった。

以上のように、活動の中味は、全く自主的に行なっている図書館活動から市役所の委託によりはじまった学童保育まで様々である。しかし、学童保育の例は別としても、活動のきっかけは、子ど

ものことやまわりの生活環境など非常に身近な生活上の関心から始まり、それをつきつめて行動に移してゆくという形が多い。ここにはふれなかった例だが、緑区のある新興住宅地では、防犯灯がぎれたことからその管理をめぐって自治会を結成し、その会長を続けている人がおり、自治会活動には、そうしたきっかけが多いようだった。活動はみな無料奉仕型、活動のはげみは、「様々の人に触れることができて楽しい」「人に喜ばれたり頼りにされる時にやりがいを感じる」「何よりも自分自身の成長になる」という声がかかれた。

2 ——— 活動をしている人に共通のもの

十数名の主婦たちにとって話を聞いてみると、活動の中味は様々にしても、その生活の条件や人柄にいくつかの共通点をみいだせるようだ。次にそれらを整理してあげてみよう。

①居住年数は、短かくても7年で、ほとんどが15年から20年ぐらいである。住居形態は公園の団地に住む2名をのぞいてあとは一戸建持家であり、公園の居住者でも居住年数が15年と18年である。定住性の高い人たちといえよう。

②収入を聞いたわけではないが、生活の程度は、いわゆる中流家庭といえるような普通の家庭で、とくに生活が豊かであるという印象は受けなかった。

③家族の構成は、夫と子どもは2人という、いわゆる都市の典型的な核家族である。夫の職業はほとんどがサラリーマンである。

④家事・育児など家庭生活との両立の面では、その活動の量とも関係してくるが、とくに悩んでいる様子はみられなかった。家事は、皆きちんとやり、夫や子どもに迷惑のかからないようにしているといっていた。家事を手伝ってもらおうというより、自分で手ぎわよく片づけ、たとえば、夜、家

を開ける時には、必ず夕食の準備をしておくなどの心づかいがみられる。子どもの年齢は末の子が幼なくても4歳をこえており、一番育児に手のかかる時期は、過ぎた人たちであった。しかし、現在はまだ子どもは成人しているが、「子どもがお腹にいる時」から近くの教会を借りて幼児教室を始めたりするなど、子どもの年齢に関係なく活動を続けてきた人も2、3名いる。家庭をあくまでも自分の活動の基礎として、無理のない形で続けているようであった。

⑤家族との関係では、「夫や子どもの理解や励ましがあって続けてこられた」と答えている人が多い。ある消費者運動のリーダーは、夫が活動に関連する新聞記事を切りぬいておいてくれたり、互いに意見や知識を交換し討論を欠かなさいで家族ぐるみで運動をしてきたと語っていた。少なくとも夫に文句をいわれたり、干渉されたりするという家庭はなかった。また、隣に両親が住んでいる人も2名ほどいたが、子どもの面倒をみてもらったりして活動には協力的なようだった。むしろ家庭がうまくいっているからこそ活動が続けられているとみた方がよさそうだ。そのせいか、家庭の雰囲気は明るく、開かれた感じを受けた。

⑥生活体験はどうだろうか。たとえば職歴だが、働いていた経験のある人が半数いて、しかもその中に教師が多いのが特徴的であるが、皆、結婚や出産を機会にやめている。また、病気をしたことがある人が2名いて、そのことが活動のきっかけをつくった例もある。

⑦最後に、最も特徴的なのは、活動している人々の性格上の共通点である。皆、積極的でさばけたところがあり、判断力と行動力をもった人たちである。これは、活動にとっては、必要不可欠な条件で、たとえば、ちょっとした町内会やPTAの会合などに出席した時に、自分の意見を持ち、それを発言していくことが重なって、活動のきっか

けとなっていくようだ。また、そのような性格が、家族の人間関係にも影響しており、夫も妻も自分なりの世界をもっていることが、かえってさっぱりとした関係をつくって、家庭がうまくいっているという印象もうけた。

3-----おわりに

総理府が昭和47年に、全国18歳以上の女性2万人を対象として行なった「婦人に関する意識調査」から、女性が何らかの市民活動に参加している状況(別表)をみると、参加の経験をもっている女性は、全体の13.5%にすぎず、未経験者は83%という高い割合である。参加したいという意欲をもつ人は5人に1人で21%。さらに、積極的に参加したい人になると7.5%におちこむ。地域別では横浜を含む六大市の参加状況が最も低く(10.3%)、三大市(札幌、川崎、福岡)や町村、人口10~20万未満の市が平均を上まわっている。年齢別では、いわゆる子育ての時期を過ぎ、ようやく時間的な余裕のできた35~49歳層が他の年齢層を上まわっている。つまり、活動の経験者は、ほんの一部で、しかも上述した個別調査の対象者のように10年も続けてきている人たちは、経験者の中でもわずかであろうと思われる。

意欲はあっても、いろいろな条件が整わないために、活動できない人たちも多いに違いない。そのような一つの例をみてみよう。

中区のある官舎に住むIさんは33歳、1年前に埼玉県からこしてきた。Iさんは広島県のある島出身で、10年前に同郷の夫と結婚し、長男(8歳)と次男(2歳)の4人家族である。今年2月に、区の福祉事務所に老人介護人の申し込みに行ったが、その後、次男が小さすぎるために申し込みを取り消した。申し込み理由は、結婚するまで3年半ほど保母の経験があり、「老人など弱い

別表 女性の市民活動参加状況 (複数回答, 単位%)

住民運動	1.7
消費者運動	1.6
新生活運動・美化運動	2.4
社会奉仕慈善運動	5.5
ボランティア活動	0.8
政治的活動	3.0
その他	0.8

昭和47年総理府『婦人に関する意識調査』

(注) 1人が2つ以上の活動をしている場合もあるので合計は13.5%をこえる。

人の気持ちがわかるので、何かするなら「金がないゆえに泣かなければならない人のために役立ちたい」と思っていたという。夫に、そのような気持ちを話すと「馬鹿だ」といわれるために、申し込みのことは話していない。しばらく続けてから了承してもらおうつもりでいたという。Iさんの場合は、子どもの年齢が小さいことと夫の理解を得られなかったことが重なり、結局やめてしまった。また、夫の職業により転勤が多いこともできにくい条件のひとつであった。

このように、家庭の中に何らかの問題やましてや深刻な生活の不安などを抱えている場合には、気持ちは地域にむかって開かれていきにくく、むしろ家庭の中に閉じてしまうのが大部分の傾向であろう。

(注) この調査は、企画調整局プロジェクト室の横山悠、同都市科学研究所の仲田五郎及び中川久美子の共同作業であるが、執筆は中川が担当した。